

解説

岡 真理



イラク戦争の開始から二年後、難民となったあるイラク人画家が言った——自分はイラン・イラク戦争前の平和な社会を知っているが、今の若者たちは戦争しか知らない。この戦争が終わっても、こうまで破壊され荒廃してしまった社会の倫理が回復するには、果てしない歳月がかかるだろう、と。

イラクは実際そのとおりになってしまった。新政権発足後も内戦は果てしなく続き、死神に魅入られたかのように、爆弾テロがバグダードの日常となり、数十万の市民が殺され、やがてイスラーム国（IS）なる集団が台頭、戦争の狂気は今なお続く。シナン・アントーンの小説『ただ石榴の樹だけが』（二〇一〇年）はこの、狂気に蝕まれ、死がありふれた日常と化したイラクの痛みを、ひとりの青年の内省的モノローグを通して抒情豊かに描いた作品である。

一九六七年、イラク人を父に、アメリカ人を母に、バグダードに生まれたアントーンは、

一九九二年の湾岸戦争直後に国を離れ、アメリカへ渡る。ハーバード大学でアラブ文学の博士号をとり、現在はニューヨーク大学の准教授を務める。詩人でもあり、アラビア語と英語で詩集を三冊、刊行している。

本作は著者二作目の長編小説。著者自身が英訳した『The Corps Washer』（二〇一三年）は、翌一年のサイプ・ゴバシユ・アラブ文学翻訳賞を受賞した。三作目の小説『ヤー・マリヤム』（二〇一二年）は国際アラブ文学賞の候補となり、二〇一六年に出版された四作目の『インデックス』も同賞のロングリストに残るなど、いま、アラブ世界でもっとも注目されるアラブ人作家の一人である。

作中の言葉を借りるなら「狂気に感染したかのように」に日々、「死の杯を呷り続ける」社会のありさまを描くために、著者が本作の舞台に選んだのは、バグダードに一軒しかないシーア派の「ムガイシル」、遺体の浄め場である。主人公は、代々、浄め師を稼業とする家に生まれた青年。できるものならこの狂気に蝕まれた世界を脱出して自由に生きたいと切望しながら、しかし、運命は彼にそれを許さず、彼はムガイシルで、毎日、送り届けられる「死」に向き合わなければならない。青年は、この狂気から脱出する出口を見つけないでいるイラクそれ自身のメタファーにも思える。

アントーンと同じ亡命イラク人の作家、ハサン・プラーセムが、人間の狂気が生み出すグロテスクな現実をグロテスクなままに描出するのに対し、『死体展覧会』藤井光訳で白水社より二〇一七年秋刊行予定）、アントーンはそれを直接的に描くことなく、浄め場で日々、この狂気の産物たる遺体に対峙する主人公の心情を通して描き出す。そして、イラク戦争後のイラクの「現在」に、主人公の人生の回想が交互に織りこまれながら物語は進む。兄の死（第三章）、初めてのムガイシル体験（第四章）、美術アカデミーに進学し彫刻家を目指したこと、そこで、美しい女性ルームと出会い、恋に落ちたこと。

だが、彼女はあの日、突然、彼の前から姿を消してしまう……。彼女はなぜ、いなくなったのか？ どこへ消えてしまったのか？ 青年がイラクの謂いなら、忽然と消え去り、行方知れずとなったルームはイラクの夢、平和、幸福のメタファーであるだろう。

著者三作目の長編小説『ヤー・マリヤム』は、ISの暴力に浸潤されていくバグダードの、クリスチャンの一家が主人公、また最新刊の『インデックス』は、終わらぬ戦乱によって破壊され、殺された人間たち、動物たち、事物たちの記憶の物語である。アメリカにいながら、アントーンはアラブ人作家として、アラビア語でイラクの痛みを書き続ける。